

日本行脚文集

大淀三千風 元禄二(1689)摺筆 元禄三刊行(1690)。

貞享三(1686年)四月三日の戸隠訪問の箇所に、

同余三日。戸隠にて宿坊普光。所望。長編略

○戸隠山閑窟 三諦三宮の中にも。奥院天昔を思ひ。思兼

神児。勇猛手力雄尊。明闇の戸をひき放ち。信州當谷に提。

御自神も、寂寞金剛の窟内に曳籠り。全躰不転肉身にして。

九頭龍権現とよはれまして。神寿を龍花の暁に期し。衆生

の八苦にかはり。三熱に勞じおはしますこそおそれしけれ。

往古よりの奇瑞まちくなる中にも。日々に十一合一飯の

葉盤調ハ一粒も残し給はぬ。かつ氏人の備ふる初穂の珍

華を齶然咀嚼(齶のつくりは告)ます音は瀑布にひゞき。和

光交夢の魫(魫のつくりは空)は松風にこたふとかや。げに

神國第一の生神。語るに身ノ毛もいよだちぬ。仲古白露金

風の気仙。学門行者。神仏胎金の法山とはけちめ給ふ。幣

殿梵閣。岫につゞき。麓にならぶ。されば三十一三窟の

灵舎。一十二一峯の佛跡。社僧六一一宇。境内十一里餘あり。

こゝろざしの詔^{ノツト}刀言^{ゴト}してあふぎみれは。回^{グルリ}は八^ヤ重^ヤ八^ヤ山の
つゝみ。玉樹^{モノイ}言^{モノイ}ひ。雪岩^{ライエン}眠^ヲり。獺^{ベツ}猿^ツは御贄^{ウキウ}魚^{ウキウ}を釣^{ウキウ}り。鳥鳩^{ウキウ}
ハ拔^{ヌキ}稻^{コメ}を捧^サぐ。こや仙泉^{イスマツ}の常^{トコロ}世^ヨにやあらん。さながら無相^{ウナツ}
無^ム心の空^{ソラ}胎^マに居^イり。生^ナれぬさきの父母^{フボウ}の倂^ニ。風^{フウ}水^{スイ}に諾^{ダク}きて
○其^{ソノ}声^{コエ}や此^{ココ}暁^{アカサ}の郭^{カク}公^{キョウ}

へうごきなき山^{コノロ}を慮^{ガキ}の神籬^{モトスエ}は始^{ハジ}終^{マタ}わかぬ天^{アメ}の御^ミ柱^{ハシラ}

註 愛知県立大学貴重書コレクション『日本行脚文集』に
画像公開。巻六の5コマ目、6コマ目。『新編信濃
史料第22巻』にも別翻刻所収。